

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

## 主宰論説8

### 定年の区切りと再出発

65才の定年になり、10年務めた北九州市立大学を退職し、土浦の乙戸南の自宅に戻ってから1年半になる。近くの乙戸南公園や稲荷公園や第3公園の周りを30分ほど散歩しながら、腰痛等の持病に伴う体調の不具合の回復を図っている。その傍ら、囲碁、クロスワード・パズル、数独パズル、グランドゴルフなどを楽しみながら、セカンドライフおよびサードライフを模索している。悠々自適と思ったが、2, 3やり残したかなと思われることもあり、まだまだがんばってみようと思い、自宅を基に、福島建築環境材料研究所2を勝手に作り、再出発を試みている。

ホームページ (<https://fukushima-institute.net/index.html>) を立ち上げて、情報発信と啓蒙に努めることにした。いろいろな学・協会は退会しないで会員を続けて、諸分野の研究情報を得ている。6月の末、定年退職の区切りと女房孝行を兼ねて、5泊8日の行程で、フランスの建築の世界遺産巡りに行って来た。その紀行文や印象に残った美しい建築群や庭園の映像及び下手な短歌、俳句を含めて、科学者の心と文筆の才能を併せ持っていたという寺田寅彦さんにあやかりたいと思い、日々気がついたことを随筆にまとめることにした。今年は、再度の政権交替もあり、新たな未来を指向しないといけない思いながら、過去の歴史も踏まえて、如何にして、持続可能な建築・都市・社会の基礎としての環境調和型建築材料・部材・建造物のあり方を考え、光、水、二酸化炭素と関連させて、色々な材料・部材・建造物の劣化の可視化と寿命評価・予測を考えるかという課題に取り組みたいと思っている。

平成24年12月17日

短歌：木枯らしが吹き抜けてゆき枯れ落ち葉乱れ飛び舞う散歩道かな

### 殺生石

那須岳の丘陵が湯本温泉街にせまる斜面の湯川に沿って、殺生石というものがあるが、そこを訪れた。何でも、九尾の狐の化身した大きな岩が、今でも閉じ込められたことに恨みを抱きながら毒気を放ち、その近くでは、動・植物も昆虫も生息できないということであるらしい。本当は、石が毒気の源でなく、湯川で毒性の硫化水素 (H<sub>2</sub>S) が発生するのが原因であるようだ。昔から、狐や狸が化身して人を化かすと言われているが、狐や狸にしてみれば、はなはだ迷惑な話であると思われる。何故、この2種類の動物のみが化身すると言われができたのだろうか？  
眼・俳句・判断力を養い、事の本質を見極める発想が必要なのかもしれないと感じ入った。

平成24年5月5日

偏見と誤解がもたらす悪しき影響は、古今東西枚挙にいとまがない。不透明なことの多い当節、特に、自ら考えて、本物と偽物の見分ける眼力と判断力を養い、事の本質を見極める発想が必要なのかもしれないと感じ入った。

平成24年5月5日

◎青春時代に作って、頭にしまい込んでいたが、晩年になり、ふと思い出して、文章にまとめ直した詩3篇：

・わが故郷黒部を称える詩一篇：

【望郷】

南方に立山連峰の雄姿を仰ぎ、北方に佐渡に連なる日本海の荒海を望む。

流れ下るは、天下の暴れ竜黒部川。

遠く十字峡に源を発し、溢れる奔流となり、峡谷を走り抜ける。

その支流48ヶ瀬となり、豊かなる黒部扇状地を形成せり。

春は、桜木わが世を唄い、近隣の丘陵花一色となる。

夏は、荒海鏡のごとく澄み渡り、遠く能登半島を眺望する。

秋は、紅葉一色となり、あまたの海の幸、山の幸が、宴席を賑わす。

冬は、あたり一面銀世界となり、北国の太陽、人の心を幻惑する。

黒部は、これ山紫水明の地、いかで蕉翁この地を唄わざるか。

・大宰府の遺跡を眺めながら思いを述べた詩一篇：

【追想】

水城北郭に横たわり、清川筑紫野を廻る。

深草の中、いずれの地かこれなる。

大宰府は要害の地、かつての隆盛誰か知らん。

日暮れて、冷氣山道を廻るとき、

官公への思い、人をして憂えせしめるなり。

・博士論文の序文の中で書いた学問と葛藤に関する詩一篇：

【寒月】

寒月煌煌として夜空を照らし、万物深き眠りに落ちる。

清澄なること、これ湖水を見るがごとく、

静穏なること、これ深山に踏み入るがごとし。

一人草舎に座して天倫を論じ、寒風吹き抜ける山徑に思いを巡らす。

慄然として天空を仰げば、寒月いよいよ青みを増し、正に、わが心に相和するがごとし。